海道狂歌合

上

洋学文庫
文庫8
D 252
1

文庫8
D 252
1

昔より東海道の道中奇事
ほまれ物人みをつくしといふそて
人乃国ゝゝを物ゝ所事也
ありけるおいされやあ説ゝ場
丁物ひゝ二人つま物ゝゝん
笠ゝ笠ゝゝ言のゝれ物ゝ游ゝの

39-8282
010190613998

曙そめしふるさと旦夕あるやも
と詠りやなこの海人せ行を
城に住ひて舟をい漕あよいつる
風紙のねもりきまなる武
住吉徒の物の者を家い
いたりよしく二百乃はを代

り必飯をすす百いあるな
お汁あるすはは事を
かうをのるかしや

陽孤山下筑紫
天四は年 飯戒書

海道相の合十八番

九　右　椿姫
　　笠家士

第一番
大津馬
おもてより近てこれを実あり

岩根ふる古木皆いかへて
矢橋丹
ふきかけ乃うまを入ぬる故ハ
やゝ毛丸山ほるおもふ人ある

来二雪

伊勢使

いせをのこ一国より彩る
色の千秋ぞめ出る使

海士ふたゝし

疫伯神祭

春と秋西ひかりゆきくる
時が一刻色ばかり一きち

大道寺めぐ
行髪ちゝみうゝ
有物をそハうと
いきれて宮

雪の雪

降る　うすけ

一ときの間のみぞれ

風うしは

力をなぶるを吹きぬく

渡り川うつ

うつ影きふかまの雪解の山陰

ゝゝくわりの浮るを見るこの

まゝ男

みるまゝふ又しのまゝを

ふきけゝぬ吉ゝる

四番

梅の花

開かるる法の光りに取
ゆふ清香をとどめ
我も新たい

林論師

星に生るゝ中をもむる
はるの水をゝ
詩つゝる春

井五首

茶亭

休らへ湯くゆす新紀香
清き手ふりの紀川乃石

髪店　かぐやひと

髪の字は新紀国の異
らしみるくいおもえし
けれ坊乃をとこをけまして
こいめり　髪音活

かき撫　ひなの乃歩行の
あらくつなんなの　郡り

赤い雲

霧の峰　みなぎ

雲津物　和種さを成

みな和とものなりを

移むと

むさぼの行く時候ふを

新一坪めぐこまに

風を打ちて

清正書

二階堂説

いまゝのかれを云言い
あるえいさう

神こを金ぞ陸の海のいろ
嵩いかゝ人乃をとりつゝ

信濃歌

わすれ草しのぶつゝ
ぞ陸まとゝ志ちの
ぞりりとれ

信濃国　元禄年間記式

東八首

旅中

野山にめてゆかきし人も旅

こゝろや乃をそろゝちとなき門

驛鈴聆踏 ステユラグ

如五月蠅 サハヘナスカド

きとハおとう然ニ通ふや

飛使 ハヤウチ

やゝ翔ハおんほとゝも

たよふ衛乃かきり

いそ経

九番

武者修行

[illegible]人[illegible]詠を
まいらせ[illegible]
仇をきりすてをうちの[illegible]

角抵

[illegible]新関山乃
名[illegible]
郭[illegible]
[illegible]之

十四

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一番

[illegible]郎生活　[illegible]

みやこを待ちつくせども

こゝ[illegible]月　[illegible]ぬ　[illegible]

三命　かくれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿二番

高畑めぐり　　ねやもとも又とめおんもとを

皐久君なたちハ祝へ

ひきたむ神乃つるや

雄波江れみ　を

おけ　を　を　ハい

歌　此五　　歌

いのゝ木まれ

ゝ花ちら萩

ゝ此五

ゝ乃

さはん

川を見

ふる雪は降れちきり乃

中河をふみくろ沼乃

隙まろ　重

雪こそは

新松山　朝霧ふる

大ゆきに

ふかぬ雪こそ　沢乃雪こそ

十四番
修験

峯しけき初雪を生ける
山ざくらかな

相公

高き業をなげくふ
ぶきまの世わたるさとを
指さしを修る

猶も修たゞ
法因の士を旨の中

ゴマノ灰

孫林

うつゝのうたゝ寝
おもふ人乃ゆめより
ぬきこゝ乃ものを

コウジキ

兼子

人乃ゆめ
みるゆめいつ乃ゆめ
いつゝ乃世ゆ

みれとゝを
うけさる

たゝ雪

社素

振人乃ふるゝ社の雪
多ゝ比ゝ多ゝ今ハ
なりぬ新

ぬるゝ海

秋の空乃くもまる
風乃ぬき
ゆゝ新乃たゝ
なをぬん

拾七番

左　枕

旅ねしわすれ夜半
みしまくら　都にいつこの
まくら乃涙なりけり

寒つゆをかく芭蕉流の
紀行とたゝへハうけ旅の

俳名

連歌師

すくせはわれそ流るゝ
今さらいにしへりつゝ波
道そつれね空

十八雪

園あれを敲、雪を
あるこの中一面川のうま
やの海乃、雪迄とハ
凡て凡と

紅毛人求碑

一雪星清きくみ拾る
一雪去れ岩領をわかつを
むいく けゝ去れ凡

李舟曾評懷素書曰狂僧狂者
謂出常則之外也而隆爲生者則
之外生在必逸其原矣俗之氣永
於拔不屑常則學力極源於所
爲無不逸之原是以後世賞鑒
徒以諧捷尊之淆事也今讀此篇
之末點撥生奇徒而其屬辭之逸
奇又吐言自詭孤流瓌奇如羅

遊龍道士世為而不一踏之
人之所安命以狂之所生者乎
余四國行第葉集後未見可
以狂名者唯斯篇有寫出之也
之黃龍信之接之以法乎
如狂狂者之人歟

丁亥仲冬　非茶子人識